

[論文]

ゲーテ『西東詩集』：「拝火教徒の巻」について

鈴木 邦 武

I

一応の完成をみたとして『西東詩集』がその「注と論考」をも付されて出版されたのは、ゲーテ70歳の年、1819年のことであった。

彼の作品中この詩集にだけ付された注解「西東詩集のよりよき理解のための注と論考」は、オリエントのことに関して不案内な読者のために「注釈を加え、説明し、実証しよう」ということで付け加えられたものだが、ここにはまた、この作品を完結したものと考えていなかった作者の意図に基づいて、この詩集が将来機会に恵まれた際どのように補充されるかも語られていて、それは42番目に「将来のディーヴァン（詩集）」と題して挿入されている。

この「将来のディーヴァン」の項の中で、本稿で取り上げようとする「拝火教徒の巻」についてはごく短く次のように述べられているだけである。

「非常に抽象的にみえるけれども極めて実際の生活に深くむすびついた、太陽と火の崇拜について全体にわたって詩として表現する

ことができなかつたのは、多様な派生的な事柄に妨げられたということがあってのことで、この上もなく素晴らしい素材は用意されている。なおざりにされたものをうまく埋め合わせる機会に恵まれたいものと思う。」¹⁾

そう語ってはいるが、その後、1827年から1830年にかけての『ゲーテ全集』決定版刊行の機会にこの詩集が補充された際にも、この部分には手を加えられることはなく、初版のときと同じままになっている。

本稿で「拝火教徒の巻」としたこの巻の原文は〈PARSI NAMEH / Buch des Parsen〉となっている。独和辞典の説明では、ドイツ語の〈Parse〉は、英語の〈Parsee〉、フランス語やスペイン語の〈parsi〉と同じく、「パルシー（教徒）」あるいは「パールシー（教徒）」となっているので、字義的には「パルシー教徒の巻」となるべきであり筆者もこれまではそうしてきた。²⁾ しかし、上記の言語に関する辞書ではそれぞれに「イスラーム教徒の迫害を避けるため8世紀ごろインドに逃げたペルシア系のゾロアスター教の一派の人」という説明も付されており、また、「パルシー」という項目を収録している日本語辞典（小学館『日本国語大辞典』、小学館『国語大辞典

言泉』や百科事典（こちらでは「パルシー」、小学館『日本百科大事典』、平凡社『世界大百科事典』）でも同様の説明をしていて、「パルシー教徒」というと「イスラーム教のアラビア人による侵攻の際にペルシアからインドに逃れた拝火教徒」という限定的な意味で用いるのが一般的であるとみなしなければならないようである。

ヨーロッパの言語で用いられている〈Parse〉、〈parsī〉はペルシア語の〈pārsī〉を語源とするもので、この〈pārsī〉は「ペルシア」を意味する〈pārs〉からの派生語で「ペルシアの」という形容詞か「ペルシア人」という名詞である。しかし、『Brockhaus Enzyklopädie』での〈Parsen, Parsi〉についての説明で「今日のゾロアスターの信奉者」となっているように、ヨーロッパでは「インドに逃れずにペルシアに留まった拝火教徒」をも含めた意味でも用いられている。「注と論考」を含めて、『西東詩集』の中で問題とされている〈Parse〉はこのような広い意味での、「拝火教を堅持しようとするペルシア人」ということなので、ここでは「拝火教徒」を用いることにした。³⁾

なお、拝火教の創始者とされるゾロアスターに因む「ゾロアスター教徒 (Zoroastrians)」という呼称について『The Encyclopaedia of Islam』では、〈Gabr〉または〈Madjus〉を参照となっていて直接〈Zoroastrians〉の説明はなく、〈Gabr〉についてはイスラーム教徒によるゾロアスター教徒に対する侮蔑的な呼称として用いられたものとしている。語源的には定かではなく、副次的には「不信心者」を意味していてイスラーム教徒の侵攻のもとでペルシア語がアラ

ビア語の文字で表記されるようになった過程の中で出来たものであろうとしている。侵攻したアラビア人がイスラームを受け入れようとしなかったゾロアスター教徒を侮蔑的にそのような呼んだものと推測される。Sven H. Hartman 著『Parsism. The Religion of Zoroaster』でも「ペルシアに住む拝火教徒は普通 gabrs と呼ばれている」としている。⁴⁾

一方、〈Madjus〉は本来ゾロアスター教の聖職者を意味し、アラビア語ではこの語がゾロアスター教徒を示す言葉とされているが、ゾロアスター教を国教としたサーサーン朝下にあってはゾロアスター教の聖職者たちは政治にも大きく関わり、宗教的ヒエラルヒーが同時に政治上のヒエラルヒーでもあったので、イスラーム侵攻後は彼らは追放され、身の安全を守ろうとすれば自分の宗教を捨てなければならなかった。

しかし、あくまでもゾロアスター教信仰を堅持しようとした者たちは、東方のインドへ、特にその西海岸のグジャラートに移り、多くのヒンズー教徒が彼らに対して寛大であったということもあって、そこに落ち着くことになった。彼らは純潔を尊び、両親がゾロアスター教徒である者のみを同じ宗教徒と認める態度を堅持し、同じ信徒でなければ結婚を認めなかったため、政治的な勢力拡大には繋がらないということもその根底にはあったものと思われる。こうして彼らがパルシー教徒と呼ばれるようになるが、インド西海岸が17世紀以降アジアとの貿易を目指して進出してきたヨーロッパ人の拠点として重要な地域となるにつれて、これらヨーロッパ人との貿易による交流の中で富を蓄え、それによって教育のレベルも向上し、やがてインドにお

ける産業革命を導くことになり、そのことによって更に西インドの多くの分野で指導的な役割を果たすことになる。さらに、一部の傑出した人物はインドの政界でも重要な役割を担うことになる。例えば、インドの〈Grand Old Man〉と呼ばれたダダバイ・ナオロジ (Dadabhai Naoroji, 1825 - 1917) はインド議会の設立に努力し、3度その議長を務め (1886, 1893, 1906)、British Parliamentの最初のアジアから選出された議員 (1892 - 1895) であった。J. ボイドは彼らがインドでは最も企業精神に富み、教育を受けた宗派で、1921年の時点で10万人を数えたとしている。⁵⁾

II

「拝火教徒の巻」は、前にも触れたように完成したものとはなっていない、わずか二つの詩を収めただけのもので終わっている。二つのうちの 一つは、「古代ペルシア信仰の遺訓 (Vermächtnis altpersischen Glaubens)」と題されていて『西東詩集』の中では最も長いものの一つで19節から成っている。制作は1815年3月13日で、その年の5月30日に作成された「ヴィースバーデン目次表」では「遺訓 (Vermächtnis)」となっている。その各節がすべて4行で成立し、強弱格のトロカイオスの5詩脚、女性韻の対韻2組で構成されている。⁶⁾

「遺訓」というタイトルが示すように、人生の最後に至って弱った老身を若い者たちに支えられて維持しつつ、死別するときを間近かに控え、貧しくはあるが拝火教徒として敬

度に生き抜いた一老人が、忍耐をもって養ってくれた年下の者たちに、今自分が地上から去って行く際にどのような遺訓を残すべきか問い掛けることからこの詩は始まる。

兄弟よ、きみたちが辛抱強く支え
その最後の日々を看護しながら敬って
くれた
貧しく敬虔であった去り行くこの私は
きみたちにどのような遺訓を残すべき
か

こう語るこの人物は、拝火教の指導者である聖職者というよりは、自分に与えられた仕事をこつこつと生涯励んできた貧しい老人であろう。勤勉で敬虔な農耕牧畜を営む農民を思い起させる。貧しくあることによって彼は容易に敬虔にもなれた。老人はその貧しい自分たちと全く反対の立場にある存在として王を上げ、2節目で描く。

黄金を身に付け、まわりもそれで飾り
自分にもその重臣にも
降りしきるあられのように宝石を振り
まいて
騎馬で進む王の姿を度々見たが、

マルコ・ポーロを初めとして既にゲーテの時代多くのヨーロッパ人がオリエントに旅してその記録を残していて、「注と論考」の中でもサー・ジョン・マンデヴィル、ピエトロ・デラ・ヴァレ、アーダム・オレアーリウス、ジャン・バプティスト・タヴェルニエ、ジャン・シャルダンの旅行記の恩恵を受けていることにゲーテは触れているが、それらの中でのペ

ルシア王についての印象の一つはこの詩節に述べられているようなものであった。

例えばシャルダンはその『ペルシア紀行』の中で、一時退けられていた宰相が再びその重職に復帰させられたことに対する返礼に王を自宅に招待したときのことを以下のように記述している。

「・・・宴は二十四時間も続いた。王が宰相の邸に来られたのは朝の八時。王宮と宰相の邸までの間の道は金、銀のブロケードで覆われ、両側には家臣、召使いが、めいめい、宰相が王に献上する立派な贈物を一つずつ捧げ持って、生垣のように立ち並んでいる。献上品は毛織物、絹や金糸織の布、金銀製や陶器の皿、馬具、鞍、馬衣、金貨や銀貨などであった。王が邸の門にあと六歩というところまで来ると、待ちうけていた宰相が王の足許に千リーヴルほどの金銀銅貨を撒かせた。王を盛大に迎えるこのやり方を「ピシ＝アンダーズ」という。「ピシ」は「前に」の意味、「アンダーズ」は「撒く」とか「延べる」という動詞。これはもっぱら君主を迎えるときに行われるので、道を布で覆うなどという贅沢なこともこのときに限られる。もっとも布は道の片側にだけ敷き、もう一方の側は掃き清め、水を打ち、とくに花の豊かな土地や季節には、一面に花を撒いておく。・・・王侯が通る時に道に絨毯を敷くのは、東方では最も由緒の古い習慣の一つであり、何処でも見られるものだ。」⁷⁾

「注と論考」の中でもアンヴァリー（1189年か1191年没）というセルジューク朝スルタンのサンジャル（在位1118 - 1157）に仕えた宮廷詩人を紹介するのに、この詩人が、従者を従え、きらびやかに装って馬で通り過ぎ

る宮廷詩人の華やかさを見て自分も宮廷詩人になることを思い立ったというような話を取り上げている。⁸⁾ 王侯あるいはそれを取り巻く貴人たちはそのような生活を送っていたのであろうが、この詩での拝火教徒の老人はそのようなことには一顧だにしない。

きみたちはそのことで一度でも王を羨んだことがあったか
いや、もっと壮大に目を楽しまされたではないか
太陽が朝の翼に乗って
ダルナヴェントの数知れぬ峰々から

弧を描いて昇るとき、誰が
その方に視線を向けずにいられようか
私は感じに感じた、この長い人生において
幾度もわが身が昇り来る太陽と共に運ばれるのを

その玉座に神を認め
神を生命の泉の主と呼び
その崇高な光景にふさわしく振舞い
その光の中を歩み行くことを

(3節～5節)

拝火教徒の老人にとって地上のいかなる金銀財宝にも増して昇り来る太陽が遥かに崇高なものであった。その太陽はダルナヴェントの峰々から昇るというそのダルナヴェント(Darnawend)は、イラン中部を北西から東南に延びている中部山系の一部を成すものであった、ゲーテはこの山のことをオレアーリウスの旅行記から「イスファハーンから4日

の旅程」にあることを知る。⁹⁾ ただ、オレアーリウスでは〈Damawend〉となっていて、一般にはダマーヴァンド〈Damawand〉は、テヘラン北方のエルブズ山脈中の5671mの最高峰の山のことで、それだとイスファハーンから離れすぎているようで地形的には適合しない。この詩の中で場所を示す語としてはもう一つゼンデルートという川の名前があげられているだけである（19節）。ゼンデルート（ザーヤンダ・ルード Zāyanda-rūd、ザンダ・ルード Zanda-rūd、ザリーン・ルード Zarīn-rūd 等とも呼ばれる）はイラン西南部を走るザーグロス山脈中の山ザルダ・クーの東の斜面から源を発し、イスファハーンの南東を通過し、カーヴフーニーと呼ばれる沼地に注ぐ川である。この二つの名前からこの詩の拝火教徒のいる場所がイスファハーンであることを推察することができる。サファヴィー朝（1502 - 1736）の第5代シャー、アッバーズ（1571 - 1629; 在位1588 - 1629）は17世紀の初め1500の拝火教徒の農民の家族を労働者としてケルマーンからイスファハーンに移住させ、ザンダ・ルードの対岸に住ませたことが伝えられていることから10）、イスファハーンにはある程度の拝火教徒が住んでいたものと思われる。

第5節で拝火教徒の老人は、太陽を神の玉座と認め、生命の泉と呼ぶ。彼もかつて生誕の際には太陽の光にかざされ、羊水などの汚れを清められたはずである。「人は生命の源へとあこがれる」というファウストの言葉（1201行）のように、彼はあこがれの気持を抱きつつ太陽を崇拝する。

「太陽の崇高な光景にふさわしく振る舞う」ということはどういふことか、老人はそれを「重

い勤めを日々持続させること」にあると見る。それが彼が後に続く者に残す遺訓となるのだが、しかし、その前に太陽が完全に昇りきったときの、彼のありようはこうだ。

しかし燃える太陽が完全に昇りきると
暗闇の中にいるかのように目がくらみ
胸を打ち、さわやかさを取り戻した手足を
頭を前にして大地に投げ出した
(6節)

この情景は、『ファウスト』第2部の冒頭で空中に漂う聖霊たちの力で生氣を取り戻したファウストが初めて太陽を仰ぎ見た時の情景と合い通じる。

あちらを見あげよ！ ——巨人のような山々の頂きが
もうこのうえない荘重な時を知らせている
あの頂きは早期に永遠の光に預かることができる
そのあとで光はわれわれの方に射してくるのだ
今や緑に沈んだ草地にも
新しい輝きと明るさが恵まれ
一段一段と下のほうまで行き渡る
太陽が現れる！ ——悲しいことに私は
もう、目がくらみ、目の痛みに貫かれて顔を背ける
切々たる期待が最高の願いに向って心おきなく

迫り、実現の門がひろびろと開かれる
のを見たら

こうもあろうか

しかし、今やあの永遠なる奥底からあ
ふれるほどの炎が噴出すので

われわれは戸惑って立ちすくむ

生命のたいまつに火をつけようと思っ
たのだが

火の海がわれわれを取り囲む、なんと
いう火だ!

この上なくういういしいヴェールに隠
れようと

われわれが地面に目を向けるほどに

苦しみと喜びを激しく入れ替わらせ

燃えながらわれわれに絡み付いてくる
もの

これは愛であるのか、憎しみであるの
か¹¹⁾

こうしてファウストは太陽を光の根源と見
做し、それによって生命のたいまつに火をと
もそうとするが、拝火教の老人の方はその背
後に神を感じさせる太陽への畏敬の念を表明
する。拝火教、つまりゾロアスター教は善と
悪の二つの存在を認める二元論の立場に立
つ。善の最高神アフラ・マズダーは一切を知
り、全能であり、その全能性は対立者の存在
とは矛盾しないとみる。アフラ・マズダーの
全能性は、アンラ・マンユの創造する悪に対
する戦いを通して立証されると考えられた。
また、創造者としてのアフラ・マズダーの創
造行為は、単に物質的なものに止まらず、精
神的なものから神々まで、宇宙の一切の善い
ものを包含するという。太陽もまたそうして
アフラ・マズダーによって造られたもので「祭

られるに値するもの」(ヤザタ)の一つと見
なされた。¹²⁾

そこでここに兄弟たちの意志と記憶の
ために

聖なる遺訓を贈る

「重い勤めを日々持続させること」

その他には何の啓示も必要とはしない

(7節)

ここでカッコで示した「重い勤めを日々持
続させること」の一行は原文でもこの詩集中
唯一強調体の形式が取られているところであ
り、これが拝火教徒の老人が遺訓として残し
たい言葉である。「重い勤め」には宗教的な
行為も含まれていようが、それ以上に日々
の生活全般の意味が込められているとみた
い。日々の暮らしを誠実に送ること、そして
それを持続させることが大切なのだ。ここで
ゲーテの80歳の時(1829年2月)の詩「遺
訓 (Vermächtnis)」の次の一節が思い起こさ
れる。

豊かさや恵みを適度に味わえ

生が生を喜ぶところには

いつも理性を存在させよ

そうすれば過去は絶えず続き

来るべきものもあらかじめ生命をもち

瞬間が永遠となる¹³⁾

また、百歳に達したファウストが『ファウ
スト』第2部で述べる「知恵の最後の結論はこ
うだ、自由にしろ生活にしろ、日々これを戦
い取る者こそがそれを享受するのに値する」

¹⁴⁾ という詩句も関連づけて考えられる。拝

火教の老人は以下の数節でその具体的指示をする。

生まれたばかりの赤子が、太陽に向わ
せて欲しいと
その無垢な手を動かしたら
体も心も火の光の中に浴させよ
その児は毎朝恩寵を感じるだろう
(8節)

人は生まれたばかりのときに最も純潔である。純潔さを貴ぶ拝火教徒は赤子の純潔さができるだけ保たれることを願って一家の家長が赤子を太陽の光の中に捧げて火の洗礼を施した。

「注と論考」の「以前のペルシア人」の項をゲーテは次のように書き始めている。「古代ペルシア人の神への崇拜は自然を見つめることに基づいている。彼らは、創造主を敬慕しつつ、昇ってくる太陽に特別にすばらしい現象として立ち向かった。彼らは、そこに、天使たちが周りにきらめく神の玉座を見る思いであった。この心を高ぶらせる礼拝の栄誉を、誰もが、どんなに卑しい身分の者でも、日々実現させることができた。貧しい者は小屋から、戦士は天幕から出て来てあらゆる務めのうちの最も宗教的な務めが行われた。生まれたばかりの赤子にはこのような光線の中での火の洗礼を施し、そして、一日中、いや、全生涯を通して拝火教徒たちは何事を行うに際してもこの根源的天体に伴われていると考えていた。」¹⁵⁾

まず人の誕生に際しての人々の務めについて語った後で、拝火教の老人は人の死に際して取るべき務めについて触れる。

死者たちは生きているものにゆだねよ
動物とても塵と土壌で覆え
そしてきみたちの力の及ぶ限り
不浄と思われるものは覆い隠せ
(9節)

こことの関連で「注と論考」の「以前のペルシア人」では、「死者を葬る彼らの奇妙な方法は、清浄な要素を汚さないようにしようとする度を過ぎた意図に基づくものである」¹⁶⁾ とあるが、拝火教徒たちは自分たちの血筋の純潔を重んじるように、日々の生活環境のあらゆる面で清浄さを保つことに心を砕いた。

「死者たちは生きているものにゆだねよ」という表現に示されるように、拝火教徒の弔いは鳥葬である。このような弔いの仕方について、既にヘロドトス(490? - 425? B.C.)が『歴史』の中でも触れているように早くからヨーロッパの世界にも知られていたようである。¹⁷⁾ 拝火教徒の弔いはまず、死者の体は人家や草木、さらには水や火から遠ざけられた山の頂上に運ばれる。自然にあるままの状態を純粹に保つことを極めて大切にす彼らは、生命を失った者のなきがらが大地を汚さないようにすることに細心の配慮を施す。なきがらは大地と直接接触しないように、石で作られた床の上に置かれる。そのために建造されたのが「沈黙の塔」(ダグマ)と呼ばれるものである。

この「沈黙の塔」と呼ばれた建造物は、岡田明憲著『ゾロアスター教 神々への讃歌』によれば以下のように作られているということである。¹⁸⁾

高さは20から30フィートの厚い壁でかこまれた円筒型で、その天井は空に向かって開いており、入口は東の方位に作られ、堅く錠をかけた鉄の扉がつけられている。内部は、真中に垂直に穿たれた井戸のような深い穴があり、その穴を中心にして石で作られた台が三重の輪をなして取り囲む形で並べられている。この台は内側に向かって傾斜し、雨水等が中心の穴に流れ込むような構造である。中心の穴を取り囲む三重の輪は外側に並べられた台が一番大きく、内側の台が一番小さい、その一番大きな石台のくぼみには成人の男の死体が、中間の輪を成している部分には女の死体が、内側の一番小さい輪を成している石台には子供の死体が置かれるという。これらのくぼみと中央の井との間は狭い溝で結ばれ、液体分は最終的には井の中に流れ入るようになっている。そして、井の底は砂と炭の層になっており、液体中の不純物が濾過されて、大地を汚すことなく、地中に水分が吸収されるような構成になっている。

死体は、2人の死体運搬人によって塔の内部に運ばれ、裸にされる。これは、人がこの世に生まれ出るとき裸であったことによる。さらに、この塔へ入る時の死体は、誕生の時と同様に頭からであるが、これは死と生とは表裏の関係にあり、この事を儀礼は象徴する。拝火教徒は、猛禽を、死体を食うように神が創り給うたと考える。それ故、この鳥に自己の死体を与える事は、人間にとって、この人生最後の布施行である。死体が塔内に置かれるや、猛禽はたちまちのうちにそれを食いつくす。後に残るのは骨のみで、この骨は、内陸高原の極度に乾燥した地域であるということもあって、強い太陽と乾燥した空気にさら

されて、数日のうちに白骨化する。これらの骨は集められて、中央の井に投げ込まれ、砕けて土と化し、それが層をなして塔の死体が置かれた場所を洗う雨水を濾過することになる。こうして彼らは、富める者も貧しい者も、男も女も、大人も子供も、すべてが死によりこの土となって混じり合うことになる。そして、彼らの死体のどの部分も大地を汚すことはなく、死に際しても清浄さに役立つことになる。

8節では人の誕生の時の務めを、9節では人の死に際しての務めについて語った後で、拝火教の老人は10節以下で日常生活の中で守るべき務めについて語る。清浄さこそ彼が最も心を砕いたことであり、日常の生活の中でもそれが求められる。

畑は整然ときれいに耕せ
太陽はその努力に光をそそいでくれよう
樹木を植えるときも整然と植えよ
太陽は秩序だてられたものを栄えさせるものだから

水路を流れる水は
流れがとどこおったり清浄さに欠けたりしてはならぬ
きみたちのために山地から清らかに湧く
ゼンデルートはそのまま清らかに消えてゆかせよ

水の穏やかな流れを弱めぬために
溝をこまめに掘り出すようにせよ
アシやイグサ、イモリやサンショウオ

など

有害なものは共に排除せよ

きみたちがこのように大地と水とを清らかに保てば

太陽は大気をくまなく照らし

相応しく受け入れられて

生命を与え、生あるものには幸福と信

仰をもたらず (10節～13節)

耕す畑についても整然とした耕し方を求め、木を植える際にも端麗であることを望む、神聖な太陽の光に浴するためにはそれが最も相応しい状態であると考えからである。9節にも「不浄と思われるものは覆い隠せ」とある。

11節の「水路」(Kanäle)は「カナート」(kanāt)と見たい。これは、山間の高台で地下水を探り、親井戸を掘り下げ、そこから水を導こうとする方向に沿って20～30メートルごとに縦穴を掘り、これらの縦穴を狭い横穴でつないで水を通すという施設で紀元前から使用されていたらしい。¹⁹⁾ この地下水を暗渠によって遠くまで導き耕地や庭園の灌漑や村落の用水補給を図るという方法は、イラン高原から中国の新疆に至るまで広く利用され、山岳の乾燥地帯の住民の命綱のような働きをしていたようである。

源から流れ出る水が清純さを保ったまま行き渡るよう努めることも彼らの奉仕の一つであり、拝火教の老人が残してくれた「重い勤めを日々持続させること」という遺訓の意味するところは、このように大地や水を清純に保つ努力を持続させることでもあった。そのことはまた人間の内面の清純への努力とも通

じるものである。

13節ではすべてのものが清浄に保たれば、太陽が輝いてその生命を与えることが予言されるが、14節ではそれが成し遂げられたことを語る。

きみたち、このように苦勞に苦勞を重ねて苦しんだが

安心するがよい、今はすべてが清められたのだ

今や人間はあえて祭司として

石から神の似姿を打ち出すことが許される

石から打ち出される「神の似姿」とは、火のことであるが、「すべてが清められた」ということによって、飾りもなく、汚れもない純粋で混じりけがない本然のままの世界が取り戻せたということであり、こうして人間は真の祭司として火を扱うことが許されるのである。

光と熱、それぞれ働きは異なるがともに太陽の地上での働きであり、また、多様な愛の表れ方の一部でもある。15節では、この大地に神の愛が充満していることについて触れる。

喜んで認めよ、炎が燃えるとき

夜は明るく、手足がしなやかになり

かまどの迅速な火の力で

動物や植物の生ものが煮えるのを

また、薪も綿花も地上の太陽の種子であり、担い手である。これら火を維持するための材料を用意する仕事、これもまた神を崇拝する

ための立派な行為であり、日々持続させるべきことのひとつで16節ではそれを述べる。

薪を運んでくるときは喜んで行え
地上の太陽の種子を運ぶのだから
綿花を摘むとき心置きなく言うがよい
これは燈芯として聖なるものを支える
のだと

16節で触れられた材料を使ってともされるランプの炎の中にも敬虔な彼らはより高い光である太陽の反映を認める。そして神の玉座としての太陽への崇拜はどのような状況の中でも維持されて行く。

敬虔な心でどのランプの炎の中にも
より高い光の反映を認めるならば
朝な朝なに神の玉座を崇めることを
どのような不幸も妨げることはない

18節では、拝火教徒という名に相応しく、太陽への賛美がなされる。彼らは太陽の光の輪の中に天国の息吹を感じ取る。

そこにわれわれの存在を示す最高の印
がある
われわれと天使のための清らかな神の
鏡がある
ひたすら最高の存在の賛美を口にする
者は
輪をなしつつそこに集っている

最後の節ではもう一度われわれを最初の節の場面に引き戻し、ゼンデルートの岸に別れを告げる拝火教徒の老人を登場させる。

わたしはゼンデルートの岸に別れを告げ
ダルナヴェントに向って翼を羽ばたかせようと思う
日が明ければ、喜びをもって太陽を迎え
そしてそこから永遠にきみたちを祝福するために

以上で「古代ペルシア信仰の遺訓」と題する詩は終るが、「拝火教徒の巻」にはこれに1815年5月24日に制作され「ヴィースバーデン目次表」で「ブドウ (Rebe)」という題が付されていた次の12行からなる詩が題名なしに追加されている。この詩も太陽の熱で熟れたブドウに託した太陽賛歌の詩である。

太陽が大地を照らしてくれるために
人間は大地を有難く思い
ブドウの樹を楽しみにできる
ブドウの樹は鋭い収穫用のナイフのもとで涙を流す
充分熟れたその果汁が世界を清新にして
多くの人々に奮い立つ力を与えるのに
少なからぬ人々には息の根を止める力を与えることを
ブドウの樹を感じるからだ
だが人間はすべてを繁栄させてくれる
太陽の灼熱に感謝することを心得ている
酔った者は口ごもりつつよろめくだらうが
適度に飲む者は歌いながら楽しむ

III

冒頭にも触れたようにゲーテはこの巻は未だ完成したものではなく、時間があればもっと膨れ上がる予定であって、そのための素材も用意されていると語っているけれども、結局それは為されないままに終り、「拝火教徒の巻」は上の二つの詩だけの構成となった。

この二つの詩に共通に見られる点として二つのことが指摘できるように思われる。一つはゲーテ自身の思想に深く根差していることのように思われるのだが、「永遠の時の流れ」あるいは「瞬間に永遠を認める」という見方で、「古代ペルシア信仰の遺訓」の中では遺訓としてあげられている「重い勤めを日々持続させること」という言葉の中にそのことが集約されている。拝火教徒としての日々持続させる行為の中にそれが示されているし、後の方の無題の詩では、ブドウが熟した実をつける様の中に永遠の時を感じ取っている様が窺われる。このことと関連づけて例えば「中国・ドイツの四季と日々 (Chinesisch-Deutsche Jahres- und Tageszeiten)」と題する詩集の11番目の詩をあげることができる。

不快なおしゃべりの中にいて
はかないことが私を不安にする
何ものも止まることはなく、すべては
過ぎ去る
見ているものもたちまち消え去る
そして不安に満ちた
灰色に編まれた網が私を捕える

「安心するがよい！ 不滅のもの
それがバラやユリの花を咲かせる
永遠の法則なのだから」²⁰⁾

ここでは、バラやユリの咲く様子の中に永遠の時を感じている。あるいは、次のような言葉によってそれが更に具体的に感じ取ることができよう。

「移ろいやすいものと継続して行くものと
がいかに関係に渾然としているかということ
を庭の中にいるときほど私に注目させてくれ
るときはない。だって、そこでは、そのもの
と同じものを後に残すことなく、何の痕跡も
残さずにつかの間に去って行ってしまうもの
は何もないのだから。」²¹⁾

もう一つ指摘できるのは太陽賛歌への共鳴
ということである。

ゲーテは1832年3月22日に82歳6ヶ月で
他界するのであるが、そのほぼ10日前の3月
11日にエッカーマンとの会話の中で次のよう
なことを述べている。

「私の気持としてキリストを崇拜し畏敬す
ることができるかと問われたら、私は絶対に
出来ると答える。私は道徳の最高原理の神々
しい啓示としてのキリストの前に頭を下げる。
また、太陽を崇拜することができるかと
問われたら、私はまたしても絶対に出来ると
答える。何故なら、太陽は同様に最高のもの
の啓示であり、しかも、我々地上の子たちに
認知することが許されている最大の啓示であ
るからだ。私は太陽の中に神の光とものを生
み出す力とを崇拜する。われわれが、そし
て、われわれと共にすべての植物や動物が生
活し、活動し、存在するのはもっぱらそのた
めなのだから。」²²⁾

アッラーはすべての根源であり、それによって万有はその生命を与えられているという思想に基づくイスラーム教はアッラー以外のすべてのものへの崇拝を否定する。従ってイスラーム教徒からすれば太陽を崇拝するなどということは考えられないことであるが、そのイスラーム教のアラビア人にペルシアのサーサーン朝が滅ぼされたのは642年、イスラーム暦の21年の時で、それ以後イスラーム教は次第にペルシア全土を覆って行くことになった。しかし、それ以前は国教とされていただけにゾロアスター教の拝火はペルシア全土で行われていたはずである。

拝火教徒の太陽崇拝は同時にその光の及ぶところを清潔に保たなければならないということでもあった。彼らは自然全体を清潔に保つ努力を怠らなかつた。それはまた自然への畏敬と取ることもできる。「注と論考」の「以前のペルシア人」の項にも次のような描写がある。

「一こと言っておかなければならない重要なことは、古代の拝火教徒はただ火だけを崇拝していたわけではないということである。彼らの宗教は、四大が神の存在と力を知らしめているとして、四大の全要素の尊厳に基づいていた。だからこそ、彼らは水、空気、大地を汚すことを恐れ憚ったのである。人間を取り巻く自然のすべてに対するこのような畏敬の念はすべての市民的な道徳へと導くものであって、注意深さ、清潔さ、勤勉さが呼び起こされ、養われた。治山治水もそれに基づいていた。つまり彼らは河川を決して汚さなかつたし、水路も慎重に水の節約に配慮されて作られ清潔に保たれた。この水路の循環によって土地も肥沃にされ、その結果、当時は

今の10倍以上の土地が耕されていた。太陽の微笑みかける仕事は全て非常な勤勉さで行われたが、特に太陽の文字どおりの子どもとされたブドウの栽培が盛んに行われた。」²³⁾

こう語った後でゲーテは拝火教徒たちは常日頃自然を汚すまいとしていて、死者を葬る際の先にあげたような行為もそのような態度によるものであることを指摘する。また、彼らは自分の臨終に際していくらかの金を寄進し、その金で街のどれかの街路をくまなく清掃して欲しいと遺言する習慣のあったことにも注目している。彼らの自然への畏敬の態度、自然を大切に扱う彼らの生き方にゲーテは深い共鳴を感じていたように思われる。

注

- 1) Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Herausgegeben von Erich Trunz, München, 1981 (以下HAとする), Bd. 2, S. 206.
- 2) 『ゲーテとコーラン — 「西東詩集」 成立に関する比較文学的研究、その1』(南江堂、1977)126ページ等。
- 3) 邦訳された『西東詩集』では、「拝火教徒の書」(茅野肅々訳、改造社版『ゲーテ全集』第3巻)、「パルゼ人の巻」(小牧健夫訳、岩波文庫)、「パルゼびとの書」(生野幸吉訳、潮出版社版『ゲーテ全集』第2巻)、「パールサびとの書」(平井俊夫訳、郁文堂版『ゲーテ 西東詩集—翻訳と注釈』)等となっている。
- 伊藤義教著『古代ペルシア — 碑文と文学—』(岩波書店、1974)では、アケメネス朝を開いたアケメネス(ハカーマニシュ、BC700 — BC675在位)が支配した地域を「パールサ」と、そしてその住民を「パールサ人(ピト)」と呼んでいる。
- 4) Sven H. Hartman, Parsism. The Religion of Zoroaster, Iconography of Religions XIV, 4, Leiden, 1980, p. 1.
- 5) James Boyd, Notes to Goethe's Poems, Vol. II, Oxford, 1962, p. 185.
- 6) 《Bibliothek deutscher Klassiker》中のゲーテ全集で(1. Abteilung: Bd. 3/2)、「イアンボス(弱強格)」(S. 1366)としているのは、編集者の思い

違いであろう。

- 7) シャルダン『ペルシア紀行』、17・18世紀大旅行記叢書6(岩波書店、1993)462,463ページ。
- 8) HA, Bd. 2, S. 154. ゲーテはここでハマー＝ブルクシュタルの『ペルシア文学史』(Geschichte der schönen Redekünste Persiens, Wien, 1818, S. 89ff.) に従って「エンヴェリー(1152年没)」としている。
- 9) Werke Goethes, hrsg. von der deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1952, Bd. 3, S. 175.
- 10) The Encyclopaedia of Islam, New Edition, Leiden, 1960 - 2004, vol. V, p. 1113.
- 11) HA, Bd. 3, S. 148f.
- 12) 岡田明憲著『ゾロアスター教 神々への讃歌』(平河出版社、1982)24ページ。
- 13) HA, Bd. 1, S. 370.
- 14) HA, Bd. 3, S. 348.
- 15) HA, Bd. 2, S. 135.
- 16) ibid. S. 136.
- 17) 『世界古典文学全集 10 ヘロドトス』、松平千秋訳、筑摩書房、昭和42年、49ページに以下の記述がある。

「ペルシア人についてこれまで述べてきたことは、私自身の知識に基くものであるから確信をもつていうことができる。しかし次に述べる死人の処理については、秘密事項として伝えられていることで、はっきりしたことは判らない。つまりペルシア人の死骸は葬る前に、鳥や犬に食いちぎらせるということである。マゴスたちがこういう葬り方をすることは私も知っている。彼らはそれを公然とやるからである。しかし一般のペルシア人は、死骸に蠟を塗って土中に埋葬する。」

マゴスは2ページで取り上げた〈Madjus〉のこと。

- 18) 岡田明憲著『ゾロアスター教 神々への讃歌』、34～38ページ
なお、夢枕獏著の小説『鳥葬の山』(文芸春秋社、平成3年)で語られている東チベットのカムパ族による鳥葬の場合は、表面に直径40～50センチの穴が20個余り30センチ程の深さに穿たれている高さ5メートル以上もある石の上で、柩を運んできた4人の男たちによって夜中のうちに死体が切断され、その穴に入れられ、鳥に供されることが紹介されている。カムパ族の場合は、人の肉体を天に葬る儀式で、鳥はあくまでも人の肉体を天に葬る仲介者にすぎず、死体は、空を飛ぶ鳥に喰われることによって、天へ昇って行くと考えられたという。同じ鳥葬でも、大地の清潔さを保とうとする拝火教徒の場合とかなり異なっているように思われる。
- 19) 《The Encyclopaedia of Islam, New Edition》では、ウルミエ湖の近辺を支配していた古代王国Urartuの王Sargon II(721 - 705B.C.)の息子Sennacherib(705 - 681B.C.)が建設したとしている。Bd. IV, p. 529.
- 20) Johann Wolfgang Goethe, Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchner Ausg., Bd. 18, 1, S. 19.
- 21) Mit Goethe im Gasrten, Mit Zeichnungen von Werner Bürger, Zusammengestellt von Emil Engelhardt, Freiburg, S. 131.
- 22) Johann Wolfgang Goethe, Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchner Ausg., Bd. 19, S. 694f.
- 23) HA, Bd. 2, S. 136.